
死にたがりの声

流郷進一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死にたがりの声

【Nコード】

N3280Z

【作者名】

流郷進一

【あらすじ】

色々な人間模様が綴られていく予定です。

死にたがりの声

「氷山筑紫くん、十八歳。学年が上がった時から大学受験のため律儀に勉強に励むも、最後にその言い知れない感情に駆られて自分の人生に疑問を抱き、ドロップアウトする。現在はそこそこ収入に恵まれた両親の庇護のもとで将来に何の希望も持てず、ただダラダラと寿命を消費する毎日を送っている、と」

女性は片手に持った手帳に目を通しながら、一息にそう言い切ると。

「話を受けた私個人としての総括は大体こんな感じなんだが、聞いてどこか訂正したかった箇所はあるかい？」

手帳から顔を上げ、薄いレンズ越しに覗く涼しげな眼を、真っ直ぐ僕の方へと向けてきた。

彼女の言ったそこそこ裕福な家庭を象徴するかのよような広めのリビングの、テーブルを挟んで向かい合う柔らかなソファに座りながらのやり取りだ。

「いや、その通りです。特に無いです」

「そう、良かった。だったらやはり気にしなけばならないのは、言い知れぬ感情、とやらのことだろうね。そこをもう少し掘り下げていこうか」

そう言うと再び手元の手帳に視線を落とし、手先の滑らかな動きで何かを書き記していく。

僕は。

その間、どこか怪訝な表情をしていた、のだと思う。

「ん？」

メモを終えた彼女が少しばかりその眼を丸くして、作り物のような透き通った声で僕に尋ねた。

「ははっ。まあ、訝しむのも無理のないことだと思うよ。ネットの簡易投稿サービスでひたすら壁を殴るような言葉を吐いていたら見

知らぬ人物に突然コンタクトを取られて、悩みがあるなら聞こうじゃないか、ときたもんだからね。警戒するのは当然だ、と言っても

……」

家上げてからというのは、些か鈍感な反応だと思うけどね、と妙に格式ばった装飾物の整頓された部屋を見渡しながら笑った。

綺麗だが、彫刻のような冷たさのある顔。長く伸ばした艶のある黒髪。とても落ち着いた雰囲気があるけど、年齢はよく分からない。それでも多分、成人はしているのだと思う。

初対面の印象は　その、僕には分不相応の過ぎる容貌にも圧倒されたが、それ以上に、理知的で、どちらかと言えば冷徹な、機械のような人だと思って、少し怖かった。

雪のように白い、体温を感じさせない色の肌と言い、あまりにも人間離れしていたからだ。

しかし蓋を開けてみればそれはどうやら印象に過ぎなかったらしく、その振る舞いは決してふざけているわけではないが、余裕に溢れていて、よく笑顔を見せる。

待ち合わせ場所に　外に出ることを想像しただけで赤面し、鏡の前で服装に四苦八苦する内に発汗してしまうような僕が、とても話しやすいと思える人だった。

それでも。

彼女が述べた通り、その邂逅は余りにも唐突で、言ってしまえば異常なものだ。

思い切って信じたい、胸中を打ち明けたいのにそう出来ない昔から僕の邪魔をしてきたこの臆病な警戒心が、そのような場面において働かないわけがない。

それじゃあもうちょっとだけお話をしようか、と彼女は作り物のような声で、どこか優しさを含ませながら言った。

「キミの疑問が解けるまで、どんな質問でもしていいよ。まあ先に断っておくと、プライベート方面の面白い話は全くないけどね。これといった付き合いのない、仕事場で寂しい一人暮らしさ」

言いながら、自分で笑う。その外見と比べて、笑い声はとて自然なものように、僕には聞こえる。

僕は。

「仕事って、一体どんな……？」
そう訊いた。

「メールでやり取りした時にも伝えたと思うけど、じゃあもう一度言おうか」

愚昧極まりない質問に、これといって嫌がる素振りも見せずに、彼女はソファの上で一度背筋を伸ばした。

「取りあえず掲げている看板には、天宮人生相談所、と外連味に欠ける記号が乗っているよ。実態もまあ、大袈裟なものじゃない。困っている人の所に出向いて、場合に拠ってはご足労頂いて、話を聞いて出来る助言があればする。料金も大した額じゃない。今時なら中学生のお小遣いでも済む程度だ。それで少しでも救われる人がいるなら、と思ってるけど、実際どれだけ貢献できてるかは分からない」

最後の方は苦笑が混じっていた。僕は不必要に慌てて、何も知らないくせにそんなこと無いですよなどと言ってしまう。

でも本当に、彼女が本当に待っていてくれた時、その事実だけで僕は僅かながら助けられた気にもなったのだ。

声もかすれ気味で、フォローにもならない小人の醜態を、それでも彼女は有難うと言葉にして感謝した。

「でも、それはキミの警戒網をほぐしただけの情報にはなり得ないね。嘘を言っているかもしれない。疑いの証拠を提示するのは簡単だが、その逆は往々にして難しい。さて、どうしたものか……」

「いや、もういいですよ」

ん？ と彼女が疑問を如実に浮かべた顔をする。

そして、僕は自分から切り出したくせに赤面した。これ以上の説明はいらないと思ったのは本心だったけど、果たして今のタイミングで、今の言葉選びで正しかったのか、もっと良い伝え方があった

んじゃないか、そうやって過去を何度も反芻して探っていく度に落ち込んでいく。

僕の、いつもの癖だった。

「信用してくれるのかい？」

彼女のフォローは簡潔で、自身にあふれていて、分かり易い。

「ええ、と言うより仮に貴女が碌でもない人物だったとして、もうどうでも良いというか……」

たとえば彼女が巷に無数に溢れている危険で奇怪な集団の勧誘員だったとして。

まともな武器を持つことも出来ず、常にひたすら身を屈めて自衛を図っていたような僕にももう一つの、投げ遣りな諦観を持つ一面があった。

ここで勧誘を断り続けても、家の住所が団体に漏れたりすれば、こんな子供を抱えた憐れな両親にだって必ず迷惑が掛かる。祖父母やその他の血縁者にまで影響が広がるかもしれない。

到底自分一人ではケアし切れない被害が出るかも知れない、けど、それがどうしたと言うのだろうか。

それを防いだからと言って、僕のこれからに何か変化があるのだろうか。

それを防がなかったからと言って、僕に何か不都合があるのだろうか。

生活が不自由になると、どこの誰から恨まれようと、そんなもの。

全部、承知の上じゃないか。

「それは話の運びとしてはとも都合が良いけど、キミの人生にとっては結構な障害になる価値観だね」

雰囲気が一変する。氷のような表情にユーモアを含ませていた口調が、神妙なものになる。

「どうしてそう思うんですか？」

僕は言う。

「だって、そうじゃないですか。誰かに迷惑が掛かるから駄目だとか、一人前の人間としてどうあるべきだとか、それを守らなかつたからってどうなるんですか？ 守つたらどうだっていうんですか？ そんなことに固執する人間に好かれるか、嫌われるかっていうだけの問題でしょう？ 僕はそんな人にどう思われようと、どうでもいいんです。そう考えたら、今まで真面目にやっていたことが全部馬鹿馬鹿しくなつたんです。そう考えたら……」

息が荒れて、顔面が茹蛸みたいに紅潮したみつともない顔で。

「人生自体が意味の無いような、下らないことしか無いようなものに思えて、とても悲しいんです」

言い続けている間、僕はずっと彼女から目を反らしていた。誰かの目を見て話すことなんて出来ない。彼女の瞳は、射竦められそうで、尚更だつた。

本当に、恰好悪いことこの上ない。

でも僕のこの考えは間違つてない。確信がある。

倫理、道徳、常識なんてものは 人間としての尊厳を保つための模範と言うよりも、それを逸脱した者を叩くため、他人を傷付けるという背徳の快感を肯定的に得るための免罪符としての働きしかない。

その統率機能自体のミスには誰も関心がない。仮に気付いても見なかつたことにする、何故なら。

人はそれほど器用ではないし、清潔でもないからだ。

人という存在で居るためには、人は欠陥だらけだ。

下らない。

本当に下らない。

大学に入って、社会人になって、その先に一体何があるというのだろうか？

「人生というものそれ自体に、意味は無いよ」

彼女が最初の時のような口調に戻って言う。

僕は、その言葉の意味を汲み取ることが、直ぐには出来なかつた。

「え……？」

「生きてれば良いことがあるだとか、人生は本来素晴らしいものだとか、そういう戯言はあちこちで囁かれているけどね。そんなものに耳を貸す必要なんて無いのさ。ああいうのは能天気が能気宛に発信する自己満足だからね。人生をただ一つの事象として見た時に、その属性をつけるのは自分しかいないんだよ」

僕は顔を上げる。彼女の顔を見る。

氷のような表情が 春の様に、と言うのは言い過ぎだけど、柔和になつて、どこか自嘲するように笑みを浮かべていた。

「つまり、意味の無いものに自分で意味を『持たせる』のが人生だ。良いものにするのも悪いものにするのも自分次第。だけど、その意味を誰かに強制するような態度は頂けないよね」

さて、と手元の手帳が音を立てて閉じる。

「じっくり探りを入れていこうと思っていたんだけど、殊の外早急に話が進んだね。いや助かるよ。それでは」

彼女の言葉は、声質は冷たいが配慮に満ちていて、話し方がいかにも人間的に語りかけるようで、とても聞き取りやすい。

けれど、その時。

僕は決して逃れない魔力を 彼女の口から紡ぎ出される言葉の羅列に感じていた。

「カウンセリングを、始めようか」

死にたがりの声 2

「まず、会話していて気付いたことが二つほどある」

じつ、と覗き込むような視線ではなく、ソファに身体を預けて部屋の装飾を眺めながら、横目で流すように僕の方へ気を向けている。僕としても、その方が都合が良かった。執拗に見られたりするのは苦手だし、あまり丁寧な態度を取られると遣えるわけのない気を遣わなければならないと思って、余計な失敗を重ねてしまう。

そして自己嫌悪に陥る。

一度も会ったことが無いのに、長年の付き合いがある人ですら取ってくれない対応を、彼女は自然に行ってしまった。

対する僕は、柄にもない演説を繰り広げた反動で冷や汗をかきつつ、顔を俯けてテーブルの上に乗ったコップを見るようにしていた。「一つはね。私は、特にキミの価値観を『否定』したわけではないんだよ。ただ不都合な考え方だと言っただけで、むしろそっちの方が真理に近いとは思っている。けれどキミは過剰に反応し、結構な弁舌を振るって自分の正しさを主張したね。拳句に自分でそんな自分を悲しいと言った。それはつまり、私の言ったことを、内心では自覚しているとみても良いのかな？」

「それは……」

そうだ。彼女の言う通りだ。さっき彼女が言っていたことはまさしくそれだけで、それが僕の中の何かに『勝手に』触れて、慣れない口を必死に動かした。

だから僕はすいません、と謝った。単純な会話のやり取りすら満足に行えない。

「多分、そうです。僕は間違っただけで、この考え方ができない自分が嫌になっています。もっと単純に生きられたら、と何度も考えました」

うん、と一度頷いてから、それでは二つ目だと切り出す。

「キミにはどうも二つの面……おそらく、人付き合いを苦手とする自分を駄目な存在だと思い込み、必要以上に責める自虐的な面と、自分を取り巻く全てを根源的には意味の無いものだと認識し、それに纏わる責任を破棄して当然だと考える、開き直った面がある。違うかな？」

「違います。ついでに言うなら、自分がどんなきつかけで変わるのかも分からないんです」

「それは多分、キミが思っているより単純なことだよ」

僕は、はっとして顔を上げた。彼女はやはり最初は視線を適当に泳がせていたが。

やがてゆっくりと首を動かして、焦点を僕に合わせた。

僕は、彼女の瞳と正面から向かい合った。

「キミの片一方の面が象徴する、自虐という行為にはストレスが付き物だ。勿論好きでやってるわけじゃないのだからね。当然、いざれ限界を迎える。だけど周囲の人間にはそれが分からない。嫌なら止めればいいと思われてしまうだけで、そこまで想像力が回らないんだ。それがまた余計にストレスを溜める。その内に心は破裂しそうになり、自衛のために自らを破滅的な思考に委ねてしまう」

「……！」

「こんな感じかな。どうだろう？」

言われてみれば、確かに単純なことだ。思い当たることもある。納得するまで深く考える必要もなかった。

先程の場合は、『一度聞いたはずの内容を繰り返させてしまった』ということが負荷となったのだと思う。

ならばどうして、僕は今までそんなことに気付かなかったのだろうと、気付けば再び自虐を始めている僕を、彼女がしなやかな腕を伸ばして制した。

「カウンセリングなんて言ったが、専門の精神科医では無いからあまり強く断言はできない。けど多分、キミはその掬っても掬っても終わらない泥沼のような思考を繰り返す内に心の病気を患ってしま

ったのだと思う。承知しているだろうけど、具体化できないからと言って馬鹿にしてはいけないよ。病気は脳の異常だし、異常は脳の活動を衰えさせて判断力を鈍くする。以前まで出来ていたことが出来なくなっただとしても、それを嘆くのは極力防いで、そして可能な限り速やかに、病院に行くことだね」

理屈では、分かる。

そもそも反省もなく次に活かそうと意欲も無い、まるで傍から見たら被虐欲を発露しているだけのような自虐など、行う意味など全くないのだ。

そんなことは言われなくても再三分かっていることなのだが。

「それが出来ないから、病気なんだ」

僕の心を読んだかのような発言だった。

「だけど私の経験による見立てでは、キミはまだ軽傷の部類に入るよ。会話も充分なレベルで熟せているし、元々頭は良いのだろう。

その気になれば回復は早いのだと思うけど……」

「すみません」

彼女が、ん、と何かを続けようとしていた口を結んだ。一丁前に意思疎通が果たされているような気になり、僕は素直に続けることができた。

「経験、と仰られていますけど、これまでも僕みたいな人と会ったことが……」

言葉を受けた彼女は、真面目な顔付きになって。

「あるよ。それなりにね。みんな救ってきたさ」

そう答えた。

とても、今更な疑問なのだけれど。

というより、既に一度生半可な気持ちで切り捨ててしまった疑念なのだけれど。

この人は一体、何者なんだろう？

僕は全ての患者を救ってきたと言い切った、得体の知れない存在を目の前に行っているという恐怖によく自覚的になって、その想

いは僅かな攻撃性を伴って言葉となった。

「みんな……って、だって、そんなことが出来るんですか？ たかが一人の人間に」

幾らなんでも、それは大言壮語というものではないだろうか。

心に不安を抱えて満足に日常生活を送れなくなってしまった人は、表層的な症状こそ似ているかもしれないが、それこそ環境も、事情も千差万別のはずだ。

普通に考えればケアの方法だってその数だけ必要になってくるだろう。その全てを把握し、実行するだけの力が、この華奢な一人の女性にあるとでも言うのだろうか。

彼女は彫刻のような顔を崩して、口元に笑みを浮かべた。

「適当な質問を考えてくれていいよ」

「へ？」

「問題みたいな形式がいい。それを、私に尋ねてみてくれ」

「そ、それじゃあ清教徒革命は一体何年に行われたか、とか」

「あら、そんなに簡単な内容でいいのかい？ 1641年に始まって1649年に幕を閉じたね」

意図が分からないまま、取りあえず脳裏に浮かんだものを律儀に口に出していく。

「日本国憲法第二十三条の内容は？」

「学問の自由は、これを保証する。だ」

言って、ふむ、と彼女は自分の顎に手を当てながら。

「そうだな。確かにキミのような状況の人間なら、言われたところで大学受験程度の知識しか思い浮かばないだろう。だったらこう、サブカルチャーなものでもいい。たとえば何々というアニメの第何話のあらすじがどうだった、とかね」

「ええ……」

そんなもの こっちが覚えてない。と言うより、知らない。検証のしようがない。

仕方がないので、幼少の頃の記憶を辿る。頭に靄がかかったよう

になつてすんなりとはいかなかつたが、当時欠かさず見ていたとあるアニメの1シーンを思い出した。

「じゃあ、爆撃魔人ダンダークの第三十九話のあらすじを言えますか？」

そう言つと、彼女は顎を抑えながら少しばかり考えて。

「四幹部の一人ヨハネを苦戦の末撃退したかのように思われたジェニス達だったが、ヨハネが死に際に放つた光によってルーン王女が敵の基地に連れ去られてしまう。一方基地では、刻一刻と迫るダンダーク復活の時を前に四幹部の一人セレナードが怪しげな行動を取り……？ 果たして、セレナードの目的とは何なのか。そして、ジェニス達はルーン王女を敵の基地から取り返すことが出来るのか！」

少しばかりの感情を込めながら、一息に言い切つて、こんな感じかな、とまた笑つた。

「多分、一言一句間違えてないよ。確認してみるかい」

「い、いや……」

呆気にとられた。詳しい文章がどうだったかなどは記憶の彼方だが、覚えているシーンがある。

セレナードは王女を脱出させようとして彼女の身代わりとなり、大勢の仲間に背後から何本も何本も槍を刺されて殺されるのだ。

あの残酷な描写は、子供ながらの純真に強く響いた。

だから多分、そのあらすじは合っている。

「私は、神様になりたかつたんだね」

「は？」

また唐突な、それでいて余りにも非常識な、そんな発言だったので思わず耳を疑つた。

「もちろん、私は人だ。ちつぽけな人間だ。だから空は飛べないし、手から炎を出したりとか、そういう奇跡は起こせない。けれど……」
ちよつと失礼するよ、と来客用のコップに口をつけた。

「この世で起こっていること、記録されていることを知つて、覚え

ることは出来る。せめて人に残された可能性を……全ての知識を身につけて、それで誰かを助けることができたならなと考えたんだよ」
口調は、さつきまでのと何ら変わりのない、冷たい声質に余裕のある態度。

しかしその口から紡がれる内容は、あまりにも突飛な、現実感の薄い 異次元の言葉のようだった。

「だから努力した。今ので、実力の程は分かってもらえたかな？
他にも聞きたいことがあるなら……」

「い、いや。もう大丈夫です」

「そう。私は出来る限りの知識を尽くして物事にあたってきたんだ。まだまだ覚えきれてないことは数え切れなくらいあるけど、今までの彼ら彼女らは、当時の私の力で何とか助けてあげることができた、と思う」

連絡を取るようにしてるけど、分からないことはあるからね、と弱弱しい笑みを作る。

「キミは、そんな人間は存在し得ないと思うかい？ 自分には決して到達できない道だと。それでもいいよ。そういう人の無念を晴らしてあげるために、私がそれを引き受け、それなりの年月を重ねて、この道を選んだのだからね」

さて、と、突然の告白に未だ地に足が着いていない僕を引っ張るかのように話題を変えた。

「まあ、そんな身の上話はどうだっていいんだよ。何となく凄い、と思ってくれたならそれで良いんだ。私の仕事は、実はと言えばそれだけなんだ。私がキミの気持ちを理解していることを分かってもらって、少しばかりの尊敬なりをしてもらえたなら、それでね」

だってそうだと、と僕が口を挟む間もなく続ける。

「単純な精神医学の問題だったら、その道のプロがいくらでもいるさ。覚えることだけが取り柄の素人がしゃべる必要なんて無い。問題は、キミのような人間が抱えている問題が、懇切丁寧なカウンセリングや適切な薬だけでは解消しきれないということにある」

「それって……」

至極簡単な話さ、とガラス細工のように綺麗な容貌の女性は言った。

「キミは、健康な身体に戻ったとして、じゃあ他人を傷つけることに躊躇が無い下らない人間がひしめくこの社会に飛び込もうなんて、思っのかい？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3280z/>

死にたがりの声

2011年12月11日18時45分発行